

ルドルフ・シュタイナー
『内的靈的衝動の写しとしての美術史』
(GA292)
第7講

数世紀にわたって見られるクリスマスのモチーフ：
キリスト・イエスの誕生—羊飼いたちの礼拝—王たちの礼拝—エジプトへの逃避

モザイク、ミニアチュール（細密画）
イタリア、ネーデルラント、ドイツのマイスターたち

1917/1/2

ドルナハ

yucca 訳

トラペスニコフ博士 {編集者註によると、当時ドルナハで生活していたロシア人美術史家で、シュタイナーのスライドによる講義の準備をした} がスライドを整えてくださいましたので、きょうもみなさんにお見せしていきますが、これらは今までのこの種の上映の場合と同じ観点ではなく、もっと題材に関わる [stofflich] 観点にもとづいて上映されるものです。つまりこれからみなさんにお見せするのは、《キリスト・イエスの誕生》、《羊飼いたちの礼拝》、《王たちの礼拝》、そして《エジプトへの逃避》に関わる画像です。

数世紀の発展を包括しているこれらの画像によって、《クリスマス劇》のなかに生きている、そして私が前の講義で行った議論のなかに生きていたものを、いわば別の面から、私たちの魂の前に導き出したいと思います。ですから、問題は何をにおいても芸術的なものというのではなく、ある特定の題材分野の芸術による扱い、ということですから、きょうは芸術的な原理における発展についてはあまりお話しせず、その代わり、上映されるべきものためのいくつかの別の観点についてみなさんに注意を促したいと思います。

キリスト教的な芸術発展について、先週のスライド上映の際に示された考察からみなさんが引き出すことのできた一般的な特徴、この一般的な特徴に、キリスト教の最初の数世紀の芸術上の表現からルネサンス時代へと私たちが前進するなら、みなさんはきょうももちろんお気づきになるでしょう。とりわけ目にとまるのは、最初の時代の典型的な表現から、つまり私が特徴づけましたように、いわば霊的世界からの啓示の影響のもとにある時代、フォルムや色彩の自然主義的な刻印よりも、霊的世界から啓示される霊的イマジネーションの再現に目を向ける時代、このような時代から、キリスト教的芸術が、この題材分野においても、自然主義へと、すなわち物質的世界にとって現実と名づけられるもののある種の再現へと発展してくるようす、みなさんはこれをごらんになるでしょう、そして私たちは、芸術のなかの聖なる人物たちが、ますますいっそう人間的に、私たちの前に表現されるのを見るでしょう。

けれどもきょうとくに私たちの興味を引くにちがいないのは、最近の講義を貫いていた主題の具象的な体現、とでも申し上げたいものです。私たちはまず最初に、《キリストの誕生》に関わるものが上映されるのを見るでしょう。これは次の題材分野、つまり《羊飼いたちの礼拝》と完全に厳密には区別されません。つまり、最初に私たちは、羊飼いたちの礼拝との関連でキリストの誕生に関係するものを見、次いで主に《王たちの礼拝》、つまり東方の賢者たち、マギたちの礼拝に関わる絵画を見る、とすることができます。みなさんをお願いしたいのですが、これらのふたつの流れ、つまりルカ福音書の流れともうひとつのマタイ福音書の流れと呼ぶことのできる流れ -- 私たちはこれをふたりの幼児イエス [Jesusknaben] に結びつく流れと呼ぶことができます -- 、このふたつの流れがいかに関係して来たかに注意を向けていただきたいのです。芸術という点でも私たちは、多かれ少なかれ羊飼いたちの礼拝に関連するすべてのもののなかに、とりわけ良く理解されることのできたものを見なければなりません、私がみなさんにその中心をデンマークと指摘しましたあの北欧の秘儀から残されたものの影響下に、感情的、感受的によく理解され得たものをです。この流れと関連しているのは、イエスの誕生に関わるものすべて、地上的な進化から、自然存在に結びついている霊性から、いわばイエスとともに成長してくるものに関わるすべてなのです。

これに対して、星の影響のもとに -- つまり宇宙から啓示されるものの影響のもとにということに他ならないのですが --、ゾロアスター・イエスのなかに顕現する自らを告知するキリストに近づく東方のマギたちの礼拝ないし使命に関わるいたるところで、私たちはグノーシス的な流れを見出しま

す。王たちの礼拝に関連するものすべてのなかで、まさにグノーシス的な流れが、すなわち、キリスト事件は宇宙的なものであるという意識、いわば宇宙からの授精ということが起こったのだという意識が、私たちの前に現れるのです。

私たちの友人たちが親切にも、みなさんにこのように王たちを描いてくれました -- この絵は古い福音書から取られています -- {この講義の際、この「古い福音書」による《Sternbild 星座》を拡大したスケッチがホールに掲げられていたが、もはや確認できないので、《Speculum humanae salvationis》の手写本から [678] が印刷された (編集者註より)} 崇拝し、すなわち魂の力のすべてを尽くし、魂の内部全体を尽くして認識を求めながら、地球を救済すべく定められている霊の到達する星を仰ぎ見ている王たちです。



678 細密画
三人の王が、キリストの誕生を告げる星を見ている
《スペクルム フマーナエ サルヴァチオーニス (人間の救済の鏡)》
[Speculum humanae salvationis] によるペン画、ミュンヘン

マタイ福音書に現れているこの流れは、さらに数世紀が流れ去るとともに根本的にますます理解されなくなつたと言うことができます。私たちも知っているとおおり、この流れはなるほどクリスマス劇のなかにも再生しています、とは言え、東方のマギの出現ということに対して、今日では、羊飼いたちへのイエスの出現、ルカ福音書にのつとつたイエスの出現に対してもたらされたような理解がもたらされることはできません、端的に言って後者の理解は、感情及び感受の理解だからです。けれども、東方のマギたちに関わるものにもたらされねばならない理解は、グノーシス的な理解というものでなければなりません。そして《星に従うこと》ということの意味されるすべては、今やグノーシスではなく、人智学 (アントロポゾフィー) 的に方向づけられた精神科学が、いっそう公の信頼を見出すときにはじめて、ふたたび人類の意識にのぼることができるでしょう。

そして最後に、《エジプトへの逃避》、これもキリスト・イエスのグノーシス的顕現とも呼びうるものですが、これを示しているいくつかの画像をお見せします。これについてきょうは多くは語らないことにしましょう、また別の機会にお話しすることができるでしょうから。まずここで重要なのは、福音書に書かれているすべては、実際のところ、構成自体からしてすでに何かを与えることができるように構成されている、と意識すること、これを出発点とすることですね。エジプトへの逃避、これは私たちには使命との関連で現れ、つまり福音書にとっては正確にマギたちとの関連で現れますが、このエジプトへの逃避は、マギたちが最初に企図したことに基づいて、いわば成就されるわけで

す — このエジプトへの逃避が私たちに証明しているのは、旧約聖書のなかでエジプト人について、エジプト的なもの一般について言われていることと、ユダヤ民族との間に関連があるということ、福音書が考慮に入れている、ということです。モーゼはエジプトの学問、すなわちエジプト固有のグノーシスに通暁していました。そして今、福音書において私たちに語られるのは、マギたちが東方から、実際にキリストの星である星により、キリスト・イエスの生誕の地までやってくる、ということ、けれどもさらに、いわば星の進行に完全には従わない何か、マギたちの意識のなかにも生きていない何かが起こらなければならないということですが、これは福音書のなかにはっきりと表明されていますね。これは、決定、そうですね、占星学的に規定できる決定、そういう決定というのは、ある種の偉大な出来事に対してはいわば破られねばならない、ということが私たちに示されているケースのひとつなのです。占星学的な決定が、歴史的な出来事に関して知ることのできるものに、いかに厳密に従っているか、ホロスコープについてみなさんに語られることによって、みなさんもこのことをごらんになりましたね、私たちの友人たちが、時間の経過のなかでキリスト・イエスの死の日とみなされた時のために作成したホロスコープです。けれども同時に私たちには、ゾロアスターがそのなかに生きていた幼児イエスは、この星の領域から運び出されねばならなかったことがわかります。イエスはエジプトに連れていかれ、その後再びエジプトからこの星の領域にもどされます。これは、過ぎ去った古い進化の秘儀全部を含んでいます、エジプトのグノーシスのなかで先祖帰りのものとなり、意識的に自らを救済するために、いわば新たな啓示がそれと結びつかなければならない古い秘儀です。このような事柄の根底にはこうしたすべてがあり、福音書のなかにはわずかしは見られないにしても、構成の内部にはそれが含まれているのです。

この機会に私が注意を喚起して起きたいのは、福音書の場合その構成に目を向けることがとくに重要だということです。と申しますのも、テキストは多くの点で破損していて、今日では、言うならばオカルト的なテキストを助けとして読むことができる人々によってのみ、そのままの状態で見られることが可能だからです。さらにとりわけ翻訳においては、福音書テキストは理解され得ないのももちろんです。けれども構成のなかには — みなさんは、カッセルで行われたヨハネ福音書を扱った連続講義において、これをごらんになることができるでしょう — 、福音書を考察するなら誰であれ、直接すぐさま注意を引かれるであろうものがあるのです。

画像をお見せする前に、もう少し所見を述べさせていただきたいと思います。今日のような唯物主義的な時代にとっては、本来の時代意識に対する観照とでも申しあげたい、東方のマギたちの啓示の根底にあるような関連へと入っていく観照というものは、まったく失われてしまいました。今日占星学と呼ばれているものは、まったくもってディレッタントたちの手中に落ちてしまいました、彼らはそれによってあらゆる無意味なことを行い、今日では、地球と宇宙の関係について、この関係が物質的な関係、つまり星々の位置関係のなかに現れている限りでですが、この関係について語るときに、本気でそうするひとはわずかです。今日科学と呼ばれているもの、科学と称するものにとって、そもそも占星学などというのは古い迷信です。実際この占星学に関するものは、十八世紀になってはじめて、こういう表現を使ってよければ、どん底まで没落しました。十八世紀においてはまだ、マギたち、つまり三人のマギの出現の根底をなす深みについて理解を得たいのならば非常に重要な何かについて、語られていたのです。十八世紀には、古いイニシエーションの関係、秘儀参入の関係のなかからいくばくかを守ってきたひとたちによって、物質的な星位の意味について、さらには不可視の星位の意味についても語られていたのです。十八世紀には、幾人かの知者たちのもとでな

おもはっきりと語られていました、まず秘儀参加者が見ることのできる星もあるのだ、と。— これは真実です、そして、なぜ羊飼いたちにイマジネーションが現れ、マギたちには星が現れるのか理解したければ、このことはとりわけ考慮されねばなりません。このことによって示唆されるのは、羊飼いたちには、彼らが古い先祖帰りの意味で、生まれつきの、夢のような観る力を持っていることによって、啓示が現れるということです。東方のマギたちについて暗示されるのは、彼らが、まだ伝承されていた古い学によって、宇宙と地球の関係について知識を得、それによって何が近づいてきているのかを知り、何が近づいてきているのかいけば計算することができる、ということです。したがって— 私たちが絵画の発展を考察すれば、みなさんもそれにお気づきになるでしょう —、あらゆる自然主義への移行にも関わらず、のちほどこれに気をつけて見ていただきたいのですが、三人のマギに対して具象的な表現はますます適合しなくなってくることもわかります。三人にマギに対しては、極めて古いもの、典型的なものをもっとも良く適合します、意味されているものは、地上的なものから取り出されているからです。イエスの表現は、いっそう自然主義的なものに移行していくことで、親密なものとなります、なぜならここでふさわしいものは、まさに物質界からキリストに向き合うもの、つまり自然の存在と関連するものが、自然の手段によってもそのなかに最良の表現を見出すことのできるようなものだからです。

さて、以上のような註釈を述べましたが、これからまず、キリストの誕生と羊飼いたちの礼拝、そして王たちの礼拝に関連するものを見ていきましょう。



679 モザイク
キリストの誕生
パレルモ、キエサ・デラ・マルトラーナ 12世紀

このかなり古い表現のなかに、みなさんは、まさにすべてが典型的に捉えられ、そして実際のところ、東方からのその大部分は古代において神話のためにあった典型的な表現に遡るものをごらんになるでしょう。と申しますのも、まったく自然に即したしかたで、神話表現の典型的なものが、キリスト教的なものの表現のなかへと成長しているからです。ちょうど、オルフェウスのタイプ、つまりかなり古い神話表現、文化表現に遡る良き羊飼いのタイプが、新たな出来事を表現するのに使われているように、別の古い構成モチーフとでも申し上げたいものが、新たなキリスト事件のなかにそのまま持ち込まれているのです。

次の絵は、いわゆる貧者のための聖書のなかに見られるものです。



680 木版画 キリストの誕生 15世紀末

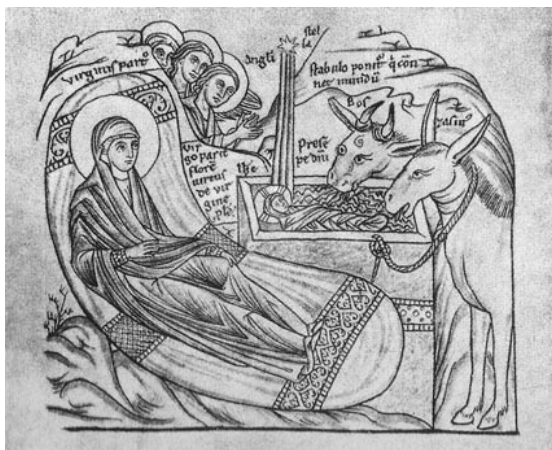
もっと前の世紀のこのような聖書は、通常、旧約聖書と新約聖書をパラレルに描いています。注目されていたのは、新約聖書は旧約聖書の成就である、ということで、これがこれらの貧者のための聖書にはさまざまに含まれています。ここでももっぱら私たちの興味を引くのは、中央のキリスト・イエスの誕生です。



681 247 細密画 キリストの誕生 11世紀

とても興味深いのは、宇宙のなかでキリストに結びつけられたものがこうして取り巻いているようです、霊的な関連についての意識がここではまだ明瞭に現れています。

次は、《ホルトゥス・デリカールム（喜びの園）》[Hortus delicialum] のなかのモチーフです。



682 ヘラート・フォン・ランズベルク キリストの誕生
12世紀末 その下：エジプトへの逃避

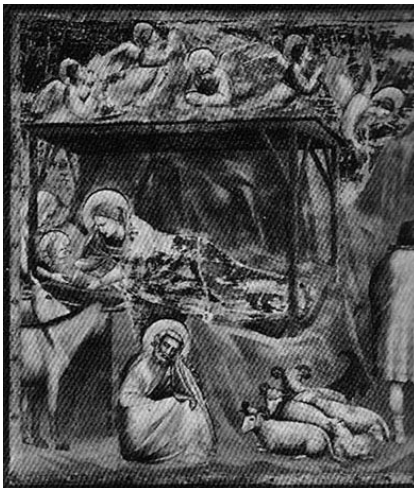
これはもう一方の絵とつながっているものですので、一緒にお見せします。このエジプトへの逃避は、のちほどあらためて見ていきましょう。上の絵では比類なく純真に誕生が描かれていますね。みなさんは、クリスマス劇のなかに見られるものとの関連をお感じになるでしょう、もちろんクリスマス劇はもっと後の時代のものですが、本来は、もう残されていないもっと古いクリスマス劇に遡るものですから。

さて今度は、十三世紀のニコロ・ピザーノの場合で、説教壇レリーフに登場するモチーフを取り上げましょう。



683a 619 ニッコロ・ピザーノ キリストの誕生

ジョットの場合は



683b 20 ジョット キリストの誕生

ごらんのように、すべては徐々に、自然主義的なもの、自然主義的な表現のなかへと成長していきます。



683c 637 ジョヴァンニ・デラ・ロツピア キリストの誕生

ここでもう十五世紀です。
さてこれは



683d 345 マイスター・フランケ 御子の礼拝

この絵はハンブルクにあります。私自身そう遠くない過去にこの地でこの絵を見たことを思い出します。

今度はフィリッポ・リッピの《クリスマス》です。



684 フラ・フィリッポ・リッピ 子を礼拝するマリア

時代の経過とともに、自然主義が表現をとらえていくようすがありありと見られます。次の絵は



685 ピエロ・デラ・フランチェスカ
キリストの誕生 -- クリスマス

です。さらにコレッジョへと進みましょう。



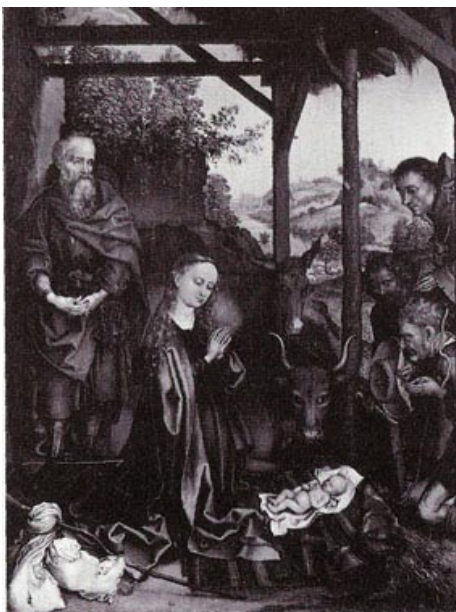
686 コレッジョ
キリストの誕生
ドレスデン

コレッジョの表現をもうひとつ



687 コレッジョ
子を礼拝するマリア
フィレンツェ

さて今度はもっと北方のマイスターたち -- 前の話からみなさんも名前をご存じでしょう -- に移り
ましょう、まず最初はショーンガウアーによる《クリスマス》の表現です。



688a ショーンガウアー
キリストの誕生

イタリアのマイスターと北方のマイスターを続けて見るができるのは非常に興味深いことです、前者ではなおもより大きな典型化、後者では個人化、及びこのように魂的なものからの創造が行われます。こう言ってもよいかもしれませんが、技術的な完成は南方のマイスターたちの場合ほど重要でないにしても、ここではやわらかな小さな足にいたるまで、すべてが魂的なのだ、と。

今度は、ネルドリンゲンのヘルリンの絵、十五世紀の作です。



688b 347 フリードリヒ・ヘルリン
キリストの誕生

ここでまさしく十五世紀末、十五世紀の最終期となり、今や十五世紀と十六世紀の転換期、デューラーに至ります。



688c 308 アルブレヒト・デューラー
キリストの誕生
木版画

ここでもみなさんは、私が光表現について申しましたすべてを、まさしく技術がとらえていることにお気づきになるでしょう。デューラーの場合このことを研究するのは何度でも興味深いことです。

次はデューラーの後継者であったアルトドルファーのもので。



688d 346 アルブレヒト・アルトドルファー
キリストの誕生

さてここで、特に《羊飼いたちの礼拝》に関わる一連の画像を映していきましょう。
最初は、聖書テキスト、福音書テキストのために描かれているかなり古い細密画で、



690a 248 細密画 羊飼いたちへの告知

980年頃のトリーアの手書き写本に含まれるものです。



689 細密画
羊飼いたちへの告知とキリストの誕生
バジリウスのメノローギウム
[Menologium des Basilius] より 11世紀

さて今度は、《羊飼いたちの礼拝》のイタリア的表現に移りましょう、最初は



690b 6 チマブエ 羊飼いたちの礼拝

ご存じのとおり、チマブエとともに私たちは十三世紀に立っています。今度はさらに、十五世紀のギルランダイオへと進みましょう。



692a 55 ギルランダイオ 羊飼いたちの礼拝

ほかならぬこのマイスターについてはお話ししましたね。

十五世紀もうひとりのマイスターはフィレンツェのピエロ・ディ・コジモです。



691 ピエロ・ディ・コジモ
御子の礼拝

今度は、私たちがネーデルラント芸術として知っているものへと上昇しましょう。
ここで、この絵の観察にかなりの時間を取ってくださるようお願いいたします。



692d, e 462, 463 ヒューホー・ファン・デル・フース 御子の礼拝

私たちはこのマイスター、フースについてもすでにお話ししましたね。

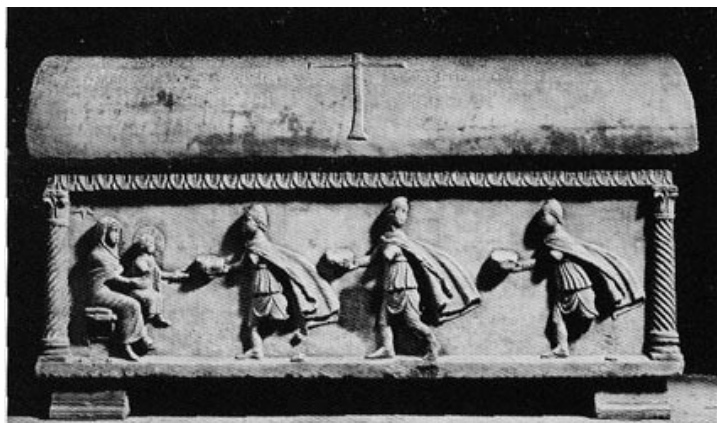


692b 560 レンブラント
羊飼いたちへの告知
エッチング



692c 527 レンブラント
羊飼いたちの礼拝

さて今度は、《マギたちの礼拝》を示している表現に移りましょう。
まず最初は、ラヴェンナの古いキリスト教の石棺に見られるレリーフです。



695a 667 石棺レリーフ
マギたちの表敬
4世紀

続いて、サン・アポリナーレ・ヌオーヴォのモザイク画です、これもラヴェンナにあります。



693 モザイク マギたちの表敬 絵の下の部分 6世紀

このようになりにかなり比較的古い絵画は、出来事を徹底してスピリチュアルな世界との関連で示して
いて、そのためあらゆる自然主義とはかけ離れ、すべてはより高い領域へと高められています。



694 細密画
マギたちの表敬
バジリウスのメノローギウムより
11世紀

今度はまた十三世紀のニコロ・ピザーノに移りましょう。



695b 617 ニッコロ・ピザーノ
王たちの礼拝

これは説教壇レリーフです。



698a 372 ティンパノン [ティンパナム、中世建築で玄関上部の半円形の壁部分]
王たちの礼拝 フライベルク 《黄金の門》

これはフライベルクの《黄金の門》ですね。これで十二世紀の後半ですが、さらに今度は十五世紀に歩を進めましょう。



696 ドメニコ・ヴェネツィアーノ
王たちの礼拝

これは以前には、ピサネッロ（ヴィットーレ・ピザーノ）の作品とされていました。
 さてこれは前にお話ししましたシュテファン・ロホナーです。



698b 239 シュテファン・ロホナー
 王たちの礼拝

今度はジェンティーレ・ダ・ファブリアーノの絵です。



697 ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノ
 王たちの礼拝

そして今度は、ほかのものと同様、このような出来事の表現においても愛すべき芸術家、フラ・アンジェリコの絵です。



699a 66 フラ・アンジェリコ
 王たちの礼拝



699b 52 フィリッピーノ・リッピ
 王たちの礼拝

このモチーフのいずれにおいても、自然主義が進歩しているのをごらんになるでしょう。これらを数世紀にわたって追求すると、とくにひとつのモチーフを追求してみると、この観点からして、これはとくに興味深いものです。



699c 71 ボッティチェリ
王たちの礼拝

さてここで十五世紀の後半で、まずは



699d 56 ギルランダイオ
王たちの礼拝

に至り、そして十五世紀末です。



699e 62 マンテーニャ
王たちの礼拝



700 ジョルジョーネ
東方の賢者たち

さてここで



701 ジェンティーレ・ベッリーニ
王たちの礼拝

さてここで、私たちが例を挙げたネーデルラント、オランダのさまざまな画家たちを思い出していただきたいのです、このファン・デル・ウェイデンとバウツの場合にも同様のモチーフがありますので。



702a 455 ファン・デル・ウェイデン
王たちの礼拝



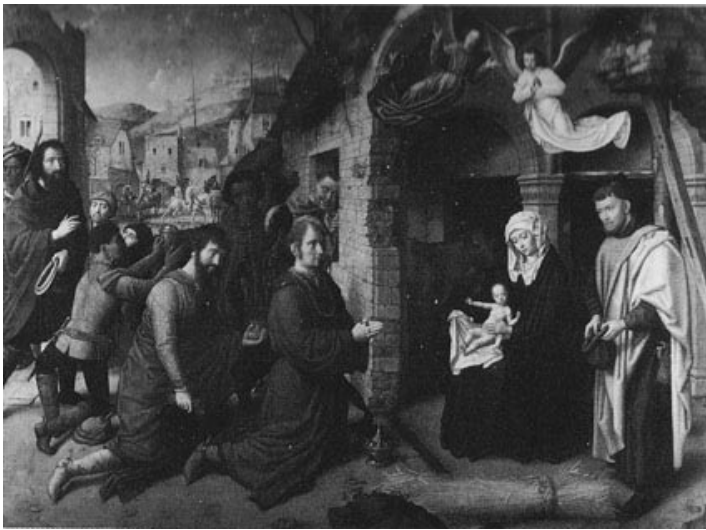
702b 459 ディーリック・バウツ
王たちの礼拝

これらの画家の特徴については前回の考察でお話ししましたね。

703 細密画
王たちの礼拝
ブレヴィアリウム・グリマニ [Breviarium Grimani]
(グリマニの日課祈祷書) より



次の絵は、ブリュージュでも描いたある画家の作品です、彼はこの地で1523年に亡くなりました。



704a 475 ヘラルト・ダフィット
王たちの礼拝

今度はレオナルドの場合の同じモチーフです。



704b 116 レオナルド・ダ・ヴィンチ
王たちの礼拝

続いてレオナルドの弟子ルイーニでは



705 ルイーニ
王たちの礼拝

続いてまた北方に移りましょう。



706a 280 アルブレヒト・デューラー
王たちの礼拝

そして同じモチーフがブリュゲルでは



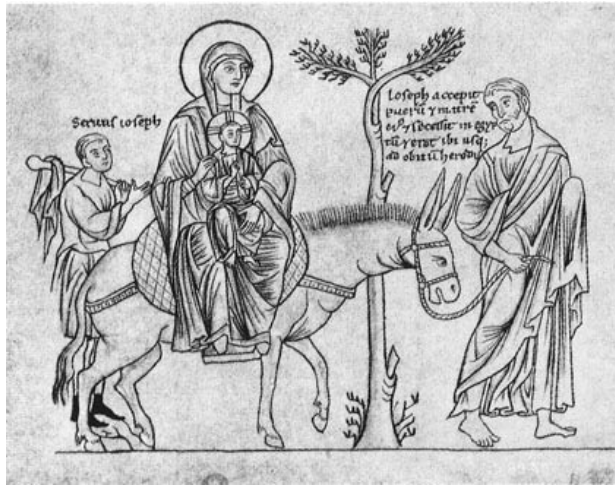
706b 495 ピーター・ブリュゲル
王たちの礼拝

同じモチーフがレンブラントの場合



706c 54 レンブラント
王たちの礼拝

さてここで最後のモチーフ、《エジプトへの逃避》に移りますが、これを連続する画像で考察していきましょう。— 最初は、すでに見ました十三世紀の表現です。



707a 682 ヘラート・ランズベルク
エジプトへの逃避
《ホルトウス・デリキアールム》より

続いて十五世紀後半と十六世紀初頭の画家たちの同じモチーフです。



708 コレッジョ
鉢を持つ聖母



707b 487 パティニール
逃避行中の休息



707c 348 ベルンハルト・シュトリゲル
エジプトへの逃避

彼はウィーンでも描き、1528年に亡くなりました。



707d 285 デューラー工房
エジプトへの逃避



709a 301 アルブレヒト・デューラー
エジプトでの聖家族の休憩
木版画

709c 327 ハンス・バルドゥング（通称グリーン）
逃避行中の休憩



バルドゥングはもう十六世紀に入っています。



709b 267 クラナハ（父）
逃避行中の休憩

最後にレンブラントの場合の同じモチーフです。



709d 562 レンブラント
遺作：逃避行中の休息、エッチング

これできょうのスライドシリーズは終わりです。

みなさんをお願いしたいのですが、ここでお見せした非常に印象深い《三人の王》の絵の表現を、後ほどぜひ近くでよくごらんになってください、キリスト・イエスの魂の到来とともに星の礼拝が直接表現されています。

